

断章 旭川のアイヌ語 地名研究

149

高橋 基

石狩川の下流から遡つてアイヌ語地名を見てきたが、漸く旭川のシンボルの旭橋周辺までたどり着いた。

をポロメム(poro-mem大きな・肩)と呼称したのであろう。

さて、ここでは「メム(mem)」を「古泉」と訳したが、一般的には「メム(mem)」は、「泉湧き水」の意味である。ところが、知里晉志保は『地名アイヌ語小辞典』で次

旭橋周辺までたどり着いた。さて、地図①は、明治三十一年製版の『北海道仮製五万分一図』(六〇%縮小)である。現在の旭橋までの国道四十号の所にあるボロメムとポンメムに始まり、現在の亀吉町から旭川駅周辺の往時のアイヌ語地名を今後見ていきたい。これらは、当連載の②から③でも述べたところであるが、新しい知見も含めて再度記述させて、お終り。

のよう記している。
①泉池、泉沼、清水が湧いて出来ている
池または沼で、魚が多く入る所。湧き
つぼ。
②チカブミ古い小川。古川の跡の小
川。

セントラル

い・古川)「川端川」と、ポンメム(pon-men)小さい・古川)「氷川」は、この二つの川は、現在の国道十二号を挟んで、対のような川だつたので、少し長く大きな川

していて近文
コタン特有の
意味・使用法と
しているので
ある。

「ヌム(mem)」説は、古川によれば世界最初のアイヌ語辞書といわれる『蝦夷ぞ



地図① 明治31年製版—「北海道仮製 5万分 1図」

方言藻汐草』に、「古川一メム」とある。この書は、当時最高の蝦夷通詞(通訳)であった上原熊次郎が、寛政四年(一七九二年)に著わし、文化元年(一八〇四年)に木版刊行されたものである。

実は、松浦武四郎も、嘉永三年(一八五〇年に編纂したアイヌ語辞書『蝦夷語』に、上原同様に、「古川一メム」を採録している。もっとも、武四郎が収録した一四五語の約八割は、『藻汐草』の写しということで、この「古川一メム」も写しの部類と思われる。

地図②は、『開基百年記念誌』(目で見る旭川の歩み)に掲載された、「上川アイヌコタン分布図」(一部改変)である。

地図②は、『開基百年記念誌○目で見る旭川の歩み』に掲載された、「上川アイヌコタン分布図」(一部改変)である。

地図①と同じ、明治三十一年
製版の『北海道仮製五万分一
図』を使用し、松浦武四郎が記
録した安政四年（一八五七年）

五月のアイヌ住居(三十一戸)を●印で表示した。カラーブラ
ン

ため、「赤」の●印である。安政四年以前の住居は、「緑」の●印で表示している。本稿では、千

ノク口のため、安政四年以前の
主書の録の印を●印と

仕居の絶頂を旨として、判別できるようにした。

地図②では石狩川右岸の示
ロメムとポンメムに住居の●

左岸にあつたのである。従つてこの記載は、明白な誤りである。

たまたま、地図①の石狩川右岸に、ポロ
メムとポンメムが記載されていたため
に、同畠地に気づかず、松浦武四郎の

記録と同一地と誤解をしたものである。この誤りの最初は、大正三年刊行の『舊西

この説の最初は『正室金子の履歴』で、その後、孫引きされていったのが『村史』である。

である。（アーチ文語地名研究会幹事）
※毎月第1週号に掲載します



地図② 上川アイヌコタン分布図